

とはいうまでもない。この構造研究においても、古典的な有機化学的手法の他に、X-線解析による構造研究も行なわれ、それらが同じ結果に達した。特にOH基の位置と立体構造の最後の決め手はむしろ後者の方であった。あとは合成による構造の確認が残されている。そしてその成功は学問的にのみならず、実際的な面においても今後多くの興味ある問題を提出し、昆虫ホルモン学の大きな発展の土台となることであろう。合成の成功が待望される。

文 献

1) E. Becker u. E. Plagge : *Biol. Zbl.* 59, 326 (1939).
 2) P. Karlson u. G. Hanser : *Z. Naturforsch.* 7b, 80 (1952).
 3) A. Butenandt u. P. Karlson : *Z. Naturforsch.* 9b, 389 (1954).

4) P. Karlson, H. Hoffmeister, W. Hoppe u. R. Huber : *Liebigs Ann. Chem.*, 662, 1 (1963).
 5) H. Hoffmeister, C. Ruber, H. H. Keller, H. Schairer u. P. Karlson : *Chem. Ber.* 98, 2361 (1965).
 6) H. Hoffmeister u. C. Ruber : *Chem. Ber.* 98, 2376 (1965).
 7) P. Karlson, H. Hoffmeister, H. Hummel, P. Hocks u. G. Spitteller : *Chem. Ber.* 98, 2394 (1965).
 8) W. Hoppe u. R. Huber : *Chem. Ber.* 98, 2353, 2403 (1965).
 9) A. I. Clark u. K. Bloch : *J. biol. Chemistry.* 234, 2583 (1959).
 10) P. Karlson u. H. Hoffmeister : *Hoppe-Seyler's Z. physiol. Chem.*, 331, 298 (1963).

抄 録

珪素含有カーバメート殺虫剤

Silicon-Containing Carbamate Insecticides.
 R. L. METCALF and T. R. FUKUTO, *J. econ. Entom.* 58, 1151, 1965.

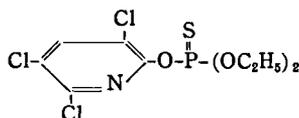
DDT やディールドリンのような塩化炭化水素は持続性があり、動物体内に残ったり、ミルクに移るのでその影響が注目されている。生体内で速かに分解される殺虫剤が要望され、その一つとして有機珪素化合物が合成された。供試化合物は *o*-, *m*-, *p*-trimethylsilylphenyl *N*-methylcarbamates で、イエバエおよびアカイエカ幼・成虫に対して殺虫試験を行なった。*m*-異性体は最も効力が強く、特にアカイエカ幼虫に対しては LC_{50} 0.25 ppm, 成虫には LC_{50} $\mu\text{g}/\text{cm}^2$ であった。イエバエに対しては単独では LD_{50} $>500 \mu\text{g}/\text{g}$, ピペロニールブトキサイド混用では $17 \mu\text{g}/\text{g}$ であった。

(石井象二郎)

新殺虫剤 Dursban

Laboratory tests with Dursban Insecticide.
 E. E. KENAGA, W. K. WHITNEY, J. L. HARDY and A. E. DORY, *J. econ. Entom.* 58, 1043, 1965.

Dursban は Dow 社で開発した有機リン殺虫剤で次の構造である。本殺虫剤はイエバエ、ゴキブリ類貯穀



害虫類、アブラムシ、ハダニ、カ、各種りん翅目幼虫など広範囲の昆虫に効力があり、残効が長い。酸・アルカリに対してもかなり安定である。

(石井象二郎)

昭和41年2月25日 印刷 昭和41年2月28日 発行

防虫科学 第31巻-I 定価 ¥ 500.

個人会員年1000円 団体会員年2000円 外国会員年U.S.\$6

主 幹 武居三吉 編集者 石井象二郎
 京都市左京区北白川 京都大学農学部

発行所 財団法人 防虫科学研究所
 京都市左京区吉田本町 京都大学内
 (板替口庵・京都 5899)

印刷所 昭 和 印 刷
 京都市下京区猪熊通七条下ル